
きゅうすを擦ってみたら何か出てきた

悲劇のM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さゆうすを擦つてみたら何か出てきた

【著者名】

Z8500E

【作者名】 悲劇のマ

【あらすじ】
ちよつとベーカー。向うだよこのあやつす。ちよつと擦つてみるべ。

俺は自分の部屋で、そいつと対峙していた。

今日、俺は誕生日を迎えた。家族で祝つてくれたのはまあ嬉しいつた。20歳つても子供はまだ子供だ。祝つてもらつたらそれなりに嬉しいもんだ。

んで、その誕生日には俺のおじさんも来てくれていた。親父の兄さんなんだが、そいつがまた変人で、外国諸国を旅して怪しいものを集めてそれを日本で売る骨董転売屋をやつているらしい。詳しい事は俺おろか、親父も知らんそつだ。そんくらい変な人だつたんだろ？

その人が誕生日プレゼントに、とくれたのが今俺の眼前にある黃金色に輝くきゅうすのよつたな物だ。ピラミッドの最奥部で見つかりそうな凄みを放つてゐるが、オッサン曰くラジオ会館エジプト支店で限定1つだつたそうだ。エジプトにいつてまで何してんだ、あのオッサンは。

あるアニメではこれとそつくりな物を魔法のランプと言つていたつけ。だが、そのアニメのランプとこのきゅうすが同じ物とは思えない。ランプはアニメの世界のものなんだから。

そして、アニメではランプを擦ることによつて変な魔人があつてた。そいで3つの願いを叶えていきやがつたんだ。模造品らしいこいつでも、魔人とか出てきて2つくらいは叶えてくれんじゃないか、と俺は思つた。いや、逆に4つだろ。俺の中の悪魔がそう呴いたが欲張つちやあいけない。欲張つて何も無かつた時の悲しみは大きいからな。よしつ、こいつはもともとただのきゅうすだ。魔人なんて出るわきやねーだろ。いや、でも1つくらい。はあ、こんな自分が時々嫌になる。

つつても物は試しつてやつだ。俺はきゅうすを擦つてみた。

「きゅうすよきゅうす、世界で一番美しいのは、どいつだあい」

いかんいかん、間違えた。それほど動搖していたというのか、俺は。こんなきゅうすことに。くそ。恐るべし、きゅうす。

俺はもう一度擦つてみた。

「エクスペクトパトローナモ」

また何を言つてゐるんだ俺は。そもそもこれ呪文とか必要ねーんじやねーのか。取扱説明書は無かつたのかよ、オッサンめ。

説明書説明書説明書。俺が念じてゐる間にきゅうすの口から煙がもくもく立ち上りやがつた。守護霊の呪文凄い。よしつ、これ絶対何か出る。そして出てきたのは

「もー、あたしを呼び出したのあんた? 用があるならひりあつてと言ひなさいよ。あんたと違つて忙しいのよ、あたしはおにやのこでした。

エジプト貴族に人気ありそうな変な金の衣装を身に纏つて、髪はちゅつと黒くてきれいだ。つーか可愛い。良い匂いもすつぞ。やべ、どうしよう。

だが俺は要らぬ感情を押し殺し、冷静を装つた声で言つた。

「おいおい、こうこうの普通いかつて男の魔人が出てくるつて相場は決まつてんだろ。なんだお前」

「何、だじやないでしょ、人を呼び出しておいて。それとこれきゅうすじやなくてラン」

「まあいいや。お前、俺の願い叶えてくれんだよな?」

俺はそいつの言葉を途中で遮つて、最も気になつてたその事を身を乗り出して聞いた。そいつは俺の期待を裏切る事無く言つた。

「あら、察しがいいわね。何を隠そうあたしはランプの魔人。あなたの願い、三つまでなら何でも叶えてあげるわよ」

いやつほー。俺は目を輝かせた。だつて願い叶うんだぜ。

「じゃあ早速、おふくろの病気を治してくれ」

そう、俺のおふくろは重度の末期癌だつた。俺はそんなおふくろを見るたびに胸が痛かつた。まあ、胸が痛かつたなんて嘘だが。

「珍しいわね。今まであたしを呼び出した奴らは皆私利私欲な願い

事だったのに、母親の為だなんて「

どうやら魔人でも人の心読むのは無理らしい。魔女だろうが魔人だろうが心読まるのはいかんな。ホントにいかんな。もしそういう奴らがいたら絶対俺の心だけは読まないでくれ。

つてなこと言つてゐるうちに変な動きしきやつてます。Hビゾリ + アシカの姿勢つても読者には伝わらんだろうな。つーか何気にエロいぞ。ほんとに何なんだコイツ。

「エクスペクトロパトローナモ」

「お前も守護霊呼んでんじやねえよ」

「ふう、これであなたの母親の病氣は全快してゐはずよ」

「あつそ、ばんざーい」

マジで叶えたのかよ。くそつ。そんな思いを胸にしまい込んで偽りの笑顔を浮かべる俺の頭に、おふくろの顔が浮かんだ。最後に見舞いに行つた時、こんなこといつてたなあ。

『母さん、早くあんたに仕事みつけてほいんだけどねえ』

高校卒業して2年の間、پータラしている俺に優しく言つてたつけ。丁度いいや。前から興味ある仕事があつたんだ。

「よし、2つ目の願いだ。俺に仕事をくれ

「どんな仕事がいいの?」

「俺ね、第一志望もともと声優だつたんだ。是非とも釘宮さんと共演してアニメの中だけでも罵られたい」

「ああ～わかつた。京アニスタジオ行つてこい。仕事くれる筈だよわあおつ、腐つたものを見る田だ。

「わーい、ばんざーい」

「で、最後のお願いは?」

俺の頭に、また母親の顔が浮かんだ。こんなこともいつてたなあ。

『母さん、はやく孫の顔が見たいよ』

「俺の子を産んでくれ
「テメエ一回死ねえ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8500e/>

きゅうすを擦ってみたら何か出てきた

2010年10月8日15時12分発行